



# 幼い難民に未来を

NO.  
14

●150東京都渋谷区広尾4-3-1 ●03-499-1226 ●振替口座/東京1-36227



大分県の電気部品工場で働くインドシナの人たち 撮影/前川 誠

## 望まれる友人としての援助

### —訪問ボランティア座談会—

去る7月、政府はインドシナ難民の定住枠を、現在の5千人から1万人に倍増することを表明しました。すでに、日本に定住した人は4千人を超え、今後さらに増加する見込です。

今回は、日本に住むインドシナの人々を訪ねている会員の方々に、これから訪問ボランティアを始めたい人へのアドバイスをさせていただきました。

出席者

森定なほみさん

秋沢ヒロさん

峯村里香さん

司会：事務局・笹尾正乃

—訪問ボランティアというのは、具体的にどのようなことをしているのですか？

森定 訪問ボランティアというと、ものものしく聞こえますが、特別なことをしているわけではありません。タイのキャンプで知り合った人が日本に定住しているの、友だち付き合いをしているだけです。時々、電話をかけた、手紙を書いたりしますが、そうするとたいがい「遊びにいらっしゃい」ということになるのです。今までのところ、いつも私が遊びに行くので、できれば日

本人の生活も見たいと思って、今度は私の家に遊びに来て、と声をかけているところです。

困ったことがあったとき、例えば給料からいろいろお金が引かれているのがなぜなのかわからなくて、かなり長いこと悩んだ末に相談をもちかけられたことがあります。日本の社会制度や会社のシステムを知らないの、税金や保険料などが引かれると不当に思えて、雇用主への不信感にまで広がっていたようでした。

秋沢 私は、ベトナムの人の健康相談を受けています

**森定** 私も、何かやってあげたいという気持ちで始めたけど、やっているうちに、これはちょっとおかしかったのです。

「してあげる」というのは、一段高いところから下を見ている状態でしょ。そうではなくて、いかに同じ高さで、一緒にものを考えられるか、が大切なんだと……。



森定さん

**秋沢** 難民は困っている。困っている人を助けるんだという意識を持ちがちですね。そうじゃなくて、友だちがほしいんですよ。友だちになれば、何か困っているときにはお手伝いできることも出てくるんじゃないかと思えます。

——難民に対して持っている先入観をまず捨てて、友だちになるということですね。

**秋沢** ただ、興味本位で友だちになるというのも困りますけど……難民の人に何か係わりたと思ったら、まず、どうして難民になったかというような、最低必要な知識は勉強してほしいですね。

**峯村** 交流会ひまわりに出席したり、事務所に来るだけでも情報が手に入りますよね。

——いろいろな問題が出ましたが、これから訪問ボランティアを始めたい人にアドバイスをお願いします。

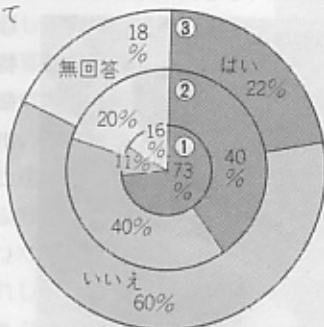
### 3. 日本人との交流

Q①近隣に住む日本人とあいさつするか

Q②近隣の掃除や集会に出るか

Q③近隣の日本人と買物に行くか

いずれの質問に対して、子どものいる世帯のほうが「はい」と答える割合が高く、子どもを仲だちに近隣へ溶けこんでいることがわかります。



### 4. 日本への永住

Q 日本に永住したいか

はい 29%    いいえ 15%

よくわからない 32%    無回答 24%

永住希望者はラオス人が最も多く、年齢が高くなるほどその割合も高くなります。よくわからない、無回答を合わせると56%にもなることは、難民の不安定な立場をよく示しています。

**森定** 日本語を教える場合も、言葉だけ切り離して教えてもダメだと思うのです。生活に密着した形で教えないと覚えられないんじゃないでしょうか。この間、カンボジアの男の人から手紙をもらいましたが、女言葉が使ってあったんです。細かいことですけど、それはおかしかったので、男の人はこういう言葉は使わないと教えました。

子どもは、日本語を覚えるのが早いですけど、逆に母国語を忘れてしまって、母親と子どもの会話がむずかしくなっているケースもあるようです。

**秋沢** 援助が必要な人がいるとすれば、それは主婦でしょうね。外に出る機会が少ないので日本語がわからない。子どもの学校から来る知らせも理解できないし、父兄会にも出席できないわけです。先生の話が早くて、わからないようです。こういう主婦の人と、積極的に友だちになってほしいですね。

**森定** ボランティアのあり方として、物をあげるというような物質的な援助ではなく、精神的な援助に重きが置かれていることを、まず理解してから始めてもらいたいですね。

**秋沢** カンボジア人の家を訪ねていたとき、急に雨が降ってきたことがあるんですが、近所の人が庭の洗濯物を見て、「雨ですよー！」と声をかけてくれたのです。こういう風に、地域の人たちと人間関係がうまくいくような手助けを、会ができるとういことです。



### ★事務局から

CYRでは、国内活動の一つとして、訪問ボランティアを充実させていきたいと考えています。どのような方法で、どのような方向に進めるかは、みなさんと一緒に探っていきたいと思います。

カンボジア人の友人を持つ鈴木文子さんからは、日本語教室・学習指導・生活相談など、テーマを決めたらどうかとのご提案がありました。また、ほかの方から情報交換の場にもなる訪問ボランティアの勉強会を開いたらどうか、とのご意見もいただきました。多くの方々のご意見・ご感想をお待ちしております。

のでベトナム人との係わりが多いですね。日本に来てすぐの頃は、交通機関もわからない、公衆電話のかけ方も知らない、非常に消極的に言葉も出ない、という人もいますが、2、3年経つと、日本人の友だちも増えて、ちゃんとやっていけるようです。



秋沢さん

キャンプで知り合ったカンボジアの人も、月に1回くらい訪ねています。

ベトナム人とカンボジア人の国民性の違いを感じるのは、ベトナムの人たちは、私が行ったらすぐに、困ったことがあれば訴えるのね。わかりにくい日本語でも、すごく積極性がある。カンボジアの人たちは、ニコニコして、お菓子や食事でもてなすことに、とても気を遣います。長い時間いろいろ話して、帰ろうとする頃に「実は……」と、ようやく相談を切り出すような傾向がありますね。

今のところ私たちは、キャンプで知り合った人を訪ねることが多いから、何人かのボランティアが同じ人たちを訪問しているケースがほとんどです。

——峯村さんは、キャンプに行った経験がなくて、訪問ボランティアを始めたわけですね。

峯村 ええ。初めは、現地スタッフの経験者に連れて

行ってもらいましたが、とってもこわかったんです。どんな人なのか、言葉が通じるのか、何を話せばよいのか……といろいろ考えて。でも、行ってみたら、来てくれたというだけで手放して喜んでくれたので、心配はパーッと消えました。

私が行ったのは、日本語を教えてほしいという要望があったからなんです。1か月ほど、テキストを使って教えました。身につきませんでした。本人に、どういうやり方がよいと思うかを聞くと、もっと外に出て、日本の中を知りたいということでした。それで、動物園や海などにいっしょに行くと、私はなるべく手を貸さないようにして、交通機関を覚えながら、日本語で話しかけるようにしています。まだ知っている言葉が少ないので、



峯村さん

話を通じない場合もありますが、あせらないでやっていこうと思っています。

最初のうちは、こっちが何とかしてあげなくちゃ何もできないんじゃないかと思っていたけど、そうじゃないんですね。何とか自分たちでもやっていけるから……。

最近では、友だちみたいな関係になってきました。ともかく会ってみると、不安や疑問はかなり消えますね。

# RESEARCH

## 厚い日本語の壁・ほしい相談相手

日本に住むインドシナの人々の生活実態調査の結果が、このほどまとまりました。

この調査は、外務省の委託を受けて国際社会事業団(ISS)が行なったもので、59年7月末現在定住していた2623人の65%に当たる621世帯1707人を対象にしています。対象者の26.7%は10才未満の子ども、32.7%は20代で、平均年齢は20.5才。

調査結果からいくつか拾ってみました。

### 1. 子どもの教育

Q学校からの書類・父母会の教師の話が理解できるか(小中学校の子を持つ世帯227対象)

わかる 22% 少しわかる 26%

わからない 35% その他 17%

Q子どもに母国語を教えているか

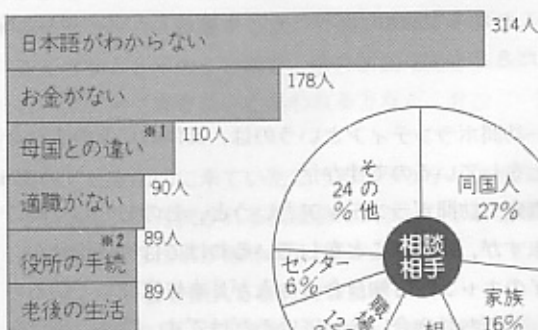
教えている 63% 教えていない 16%

### 2. 日本の生活での悩み

Q日本での生活で、誰かに相談したいことはあるか

ある 62% ない 16% 無回答 22%

#### ●困っていること、不安に思うこと、上位5



※1 食事・風呂・気候・宗教・薬・行事等

※2 外国人登録・入管手続・税金・その他

日本国国際社会事業団

避難地区を訪れて

# 国境の女性たちの 真剣な眼差し

河村好美

● 避難地区・村 '85・8  
(タイ軍最高司令部資料より)

'85年7月現在、タイ・カンボジア国境地域に、難民キャンプにも入れない避難民は約23万人。そのうち5才以下の子どもは30%、約7万人。配給される食糧状況は、ほぼカオイダンキャンプと同じであり、栄養失調の子どもは以前に比べると少なくなった。避難地域で活動している救援団体のほとんどは、医療・食糧関係であり、教育に関するプロジェクトは、ウィメンズ・プログラム(幼児を含む女性のためのプロジェクト)他、ごくわずかである。——UNBRO(国連国境救援機関)他による情報

昨年末より激しさを増してきた、ベトナム軍による乾期攻勢により、今年の初め、カオイダンキャンプの一部が、約5万4000人を収容する避難地区7にとってかわり、その後、カオイダン北方に避難地区2が新たに設立され、約5万人の人々が移ってきた。このほかにも、避難地区6、8、カンボジア国境地域にも避難村がある。このような避難地区や村の人々は、戦闘の激しさの度合いに応じて、移動をくり返している。この9月26日には、今まで避難地区7に居た人々を、避難地区2へ移したと、UNBROが発表している。

このような国境に関するニュースが入るたびに、一度国境の様子を見てみたいという思いが、現地スタッフの胸につってきた。そして、去る7月28、29の両日、ようやくその機会を得、避難地区2及び7を訪れた。

まず驚いたのは、人の多さである。道路、家の中や周りに多くの人がいる。中でも特に多いのが子どもである。5才以下の子どもの人口比率が約30%とは聞いていたものの、それは私の想像を超え、はるかに多かった。至るところに子どもがいるのである。その次に気が付いたのは、各家庭の軒下にある緑が少ないことである。やはり避難地区ができてまだ日が浅く、一か所に長く留まれないためであろう。

そして、避難地区で最も印象的だったのが、ウィメン

ズプログラムに携わる女性達の真剣な眼差しであった。今のところ、カオイダンほど組織的に充実した技術訓練や教育に関するプロジェクトはない。

「子ども達のために、もっと充実した教材や遊び道具がほしい」と語る時の女性達の目は一生懸命であった。その場所には洋裁教室があり、母親は子ども服を縫う。また、その隣には豆や米をひく石臼が数台並び、食料を作っている。その奥には託児所がある。母親と一緒に来た子どもがそこで過ごすのである。

今、国境地域にいる避難民の多くは、故国に戻りたがっている。しかし、今の状態では戻れない。政治の直接の被害者である彼らは、将来的な見通しのないまま、日日の生活を忍耐よく営んでいる。そういう中で多くの赤ちゃんが生まれ、育ち、大きくなっている。また、老いた者は、平和な日々を夢みながら、故国ではない所の土に還っていく。

同じ人間でありながら、彼らの今の状態は、あまりにも不幸である。だからといって、私に、国境地域にいる人々に対して何ができるのかと問われれば、答えようが



家財を身につけ、国境を越える  
小さな子ども  
撮影/朝日新聞写真部・福永友保

ない。せめて、彼らの、特に女性達のあの真剣な眼差しだけは忘れてはおこうと思う。そしていつの日か、あの眼差しに答えることができればよいのであるが……。

※避難地区にあるウィメンズプログラムの託児所には、CYRが作った教材数十組が、UNBROの担当官を通して入っています。



CYRのニュースや、最近出来上がったばかりの「希望の家」のビデオを見て、ある程度のイメージをもって出かけたとはいえ、5年前、昭和54年、暮れからお正月にかけて、いざりさんと訪ねたキャンプとの違いに目を見張った。

あの頃のキャンプは、有刺鉄線と土けむりと数えきれないテント小屋、そして、わずかな配給を貰うために並ぶ長蛇の列、各国のボランティアが働き回っている姿だった。

今でも有刺鉄線から出られないという状況は変わらない。しかし、他国へ多くの人々が移動して人口が減り、キャンプ内に植えられたたくさんの木・花・野菜が美しく、それらの緑が有刺鉄線を覆い隠すかのようだった。狭いけれど、テント小屋は竹やニッパヤシでつくられた住いになり、庭にも緑が繁っていた。5年前の、砂漠のようなキャンプが、今は人々の生活の場になった。

何よりも変わったと感じたことは、CYRの活動に参加しているカンボジアの人々の表情だった。それは、保育所の運営、織物、洋裁、木工の各部門に希望して入り、技術訓練を受けながら、創造する喜びを感じている人の顔だった。作品は、希望の家に通って来る子ども達の衣類だったり、教材だったり、さらに他キャンプの子ども達へのプレゼントだったりすることもある。ちょうど私がキャンプを訪れたとき、もらったばかりのスカートやズボンをはいて、うれしそうに見せていた子ども達もいた。CYRの日本人スタッフが見せたおもちゃのカタログからヒントを得たという試作品も、出来上がったばかりだった。素材は主に竹で、赤ちゃんが握って手首を振ると音のするもので、一つは丹念に木をくりぬき竹の輪を通したもので、もう一つは竹を直径2センチの筒状にし、中にクギを小さく切ったものを少し入れて、蓋をし



たものである。こんな教材を作ってみようと提案すると試作品が出来上がっていくなんて、すばらしいチームワークである。その上、竹や木を素材にした手作りの温かさが伝わってくる。

保育園の庭に何気なく置かれた小屋、ブランコ、シーソー、うんてい、砂場、鉄棒、四輪車など、すべてが木工クラスの人々の手によるものだ。木陰の涼しい場所を選んで、3-4人の男性が朝から夕方まで、コツコツとひも通し用の竹のピースを丹念に削り、穴をあけていた。1日に30コ位しか出来ない、根気のいる作業である。

それにしても、なにもなかったところにこれだけの設備を整え、キャンプ内から一步も出られない人々に喜びをもたらした意義は大きく、

## 五年ぶりのキャンプ

山極 小枝子

## 創造の喜びを知った人々



改めて、その努力に頭が下がった。

私がバンコクに着いた翌日、資材をキャンプまで運ぶ仕事があった。すでに買い求めてあった布地20巻位を車に積み込み、途中バンコク市内の文具店で教材用の西洋紙50縮めを買う。現地スタッフの小倉さんは、タイ語を使って、少しでも安くと店員と交渉していた。そこから車で5時間行くと、アランプラテートの宿舎である。体も暇なく倉庫に運び込む。

これらの作業のくり返しによって、「希望の家」が少しずつ出来上がってきたことを実感した。

# 子どもは 援助の指標

秋沢 ヒロ

子どもたちは、1年前の4月、私がカオイダンキャンプをあとにしたときと、少しも変わっていなかった。

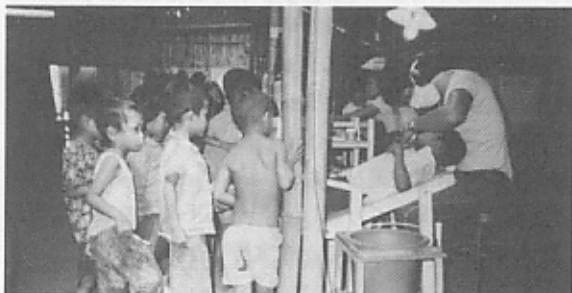
相変わらず明るく、人なつっこく、そして、弟や妹の世話をしていた。1才くらいの弟や妹を、小さな腰にかかえるように抱き、屈託ない笑顔で迎えてくれた。

保母の打つ太鼓や、キムという琴に似たクメールの楽器の音に合わせて踊っている。おやつ当番の子どもは少し得意そうな表情でミルクの入ったコップを運んでいる。陽よけの下のブランコでは、膝に妹をのせ、ゆっくりと揺れるのを楽しんでいる。ジャングルを、母と一緒にさまよっているときの発熱がもって耳が聞こえなくなった男の子は、サイト7の建設に伴い、キャンプ入口に近い家から、希望の家の近くに移ってきた。

今年の春、希望の家の子ども達が歯科検診を受けた。キャンプの中にある歯科診療所での検診は、昨年3月以来、2回目のことである。17日間の期間中、毎回15名から20名の子ども達と、付き添いの先生達が、CYRのワゴン車に乗り込み、徒歩で10分ほど離れた歯科診療所に向かった。子ども達は、めったに乘る機会のない自動車に乗り、歓声を上げ、大喜びである。

診療所に着くと、子ども達は、めずらしそうに診察室をのぞきこんだり、待ち合い室をウロウロしたり、まるで、

みんなで遠足にでも来たような楽しい雰囲気である。クメールの歯医者さんが、子ども達の歯に次々に歯垢をチェックするための真赤な試薬を塗っていくと、口中真赤にした子ども達は、友達と顔を見合わせては、おかしそうに笑う。女の子達は、口紅をつけたようにきれいだと



子どもの様子が大きく変わったのは、1981年頃ではないだろうか。希望の家ができて2、3か月たった1981年の2月頃、希望の家の昼休み。昼寝をしている私たちの耳に子どもたちの歌声が聞こえてきた。見ると庭のブランコに5、6人の子どもたちが遊びに来ていた。ブランコをこいて歌っているのだ。それを聞いて、いぎりさんが、「子どもたちが歌うようになったのね」と、しみじみと言われた。かつて子どもたちは、うつろな眼をして、力なく坐っているだけだった。

子どもは、親の生活に左右される。親の生活にゆとり(精神生活も含めて)があれば、子どもにも表れてくる。

子どもたちが、心身ともに健やかに育つためには、それを支える親の生活が健全でなくてはならない。

難民を援助するとき、子どもたちが、私たちの援助の成果を示してくれる。

はしゃいでいる。それが終わると、順番に診察室に入って一人ずつ、虫歯の有無、口腔内の異常、ビタミン不足による口内炎や口角炎ができていないか、などをチェックされる。もし虫歯が見つかり、簡単な治療や抜歯だけの場合には、その場で治療が行われる。

クメールの子どもたちは、歯医者に対し“怖い”“痛い”

という先入観がないように、ほとんどの子どもは興味津々の様子で、自分から進んで治療の席に着いていた。

検診で異常のなかった子どもは、1人ずつ歯みがき指導を受ける。渡されたばかりの小さな歯ブラシを握りしめて真剣な表情の子どもに、クメールの歯医者さんが大きな歯の模型を用いて、正しい

歯みがきの仕方を説明しながら実際に子どもに歯をみがかせる。

この検診は、子ども達、そして保育園の先生達にとって、歯の衛生習慣に触れるよい機会であった。これを活かして、歯の衛生習慣を理解し、毎日実践できるように日常の保育の中でとりこんでいきたいと思う。

## 2回目の園児歯科検診

# 虫歯はないかな?

山崎 尚枝





## 初めて見たカオイダンキャンプ

4月末から約半月間、二人の会員の方が、「自分の目でキャンプを見てみたい」と、初めて現地に行きました。以下は、お二人の報告です。

キャンプの広さ、人口を数字でわかっても、またスライドなどでキャンプの部分部分を交流会ひまわりで見ても、全体のイメージがつかめずにいました。

キャンプに到着した瞬間は、ずい分広く感じました。しかし、多くの人々が第三国へ去り、人口密度が低くなくても、有刺鉄線の外、タイの農村と比較すれば狭いところに閉じ込められていることがわかります。キャンプの背後にあるカオイダン山、まわりの広々とした畑、マンゴー、火炎樹の本立ちの緑が目まぶしいのに、キャンプの内側に視線を戻すと、茶色一色の中にわずかに緑があるだけです。一時的な受け入れという条件からでしょうか、大規模な農業プロジェクトはここにはなく、猫の額ほどの土地で自家用野菜を栽培することしか許されていないようです。

子どもたちがのびのびと育つ環境としても十分ではありません。アランヤプラテートにあるスタッフ宿舎の近くの池では、タイの子どもたちが水牛と一緒に水浴びをしていました。キャンプ内では、給水タンクから出るわずかで貴重なきれいな水を、子どもたちは浴びていました。

保父母ミーティングで“子どもの頃の遊びで、保育園の子どもに教えたものはありますか”と聞くと、ほとんどの遊びは、狭い保育園では危なくてできないという答えでした。また、子どもたちにもっと字や数を教えてほしいという母親の声も聞かれました。

キャンプというきわめて特殊な環境の中で、子どもたちが健やかに成長していくためには、キャンプの人々の意見を取り入れ、常に反省し、改善する点がたくさんあるのではないのでしょうか。 (横井和子)

建物から一步外に出ると、地面と外気が熱と共にグウンと顔やからだ全体に襲いかかり、思わずフーッと溜息をつき、それから歩き始める……自然の凄さを朝から晩まで意識せずにいられないキャンプでの半月でした。

なぜ難民が生まれ、なぜ他国から多くの民間団体が救援し、その中でなぜC Y Rが保育中心の活動をしているのか、それらの疑問の解決の糸口を少しでも見つけられればと、交流会ひまわりの係の一人として現地を見せていただくことができました。

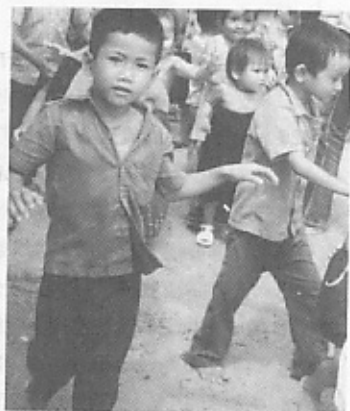
キャンプでは、タイ軍の厳しい検問を通過し、初めて踏み入れてみて、私達の日常と違うものを捜すことから始めました。病院、学校、保育園とあり、食事は配給ですが、量的には足りている……いささか拍子抜けの感がありました。しかし、3日、1週間、10日と通ううちに少しずつ大きな違いに気付いてきました。第一に何万人もの人がいながら自治権がない、市役所も町長もないのです。第二に鉄条網の囲いの中から出ることができません。もちろん買物もできません。それは生活というより、収容と呼ぶにふさわしいものでした。

しかし、その中で、「希望の家」の子どもたちは、他の保育園の子に比べ、明るく、生き生きしていました。いったいC Y Rの保育ってどんなものかしら？

期間が短かったこと、キャンプ内の他の施設の見学に追われていたことで、その疑問は持ち帰りました。

これからの交流会ひまわりで、その疑問は解決していきたいと思っています。

(高島純子)



## 催しもの

4月14日

第11回幼い難民のためのバザー。100人をこえるボランティアにより、¥1,411,091-の収益がありました。

4月27日

第9回交流会一現地スタッフ山崎尚枝帰国報告会。

5月24日

第10回交流会一アジアの識字教育について

6月2日

目黒教会、吉祥寺教会バザーに参加。

6月22日

第11回交流会一アフリカの飢饉民について

6月30日

第5回定期総会。カンボジア人を招き55名の出席者とともにカオイダンキャンプのビデオを見たり、カンボジア料理を味わい、悪天候にかかわらず盛会でした。



7月7日

青少年福祉センターバザーに参加。

7月27日

第12回交流会一なぜ難民がでるのか

8月10日

海老名市主催国際青年年バザーに参加。

8月24日

第13回交流会一現地スタッフ河村好美帰国報告会。

## CYRが国際青年年賞を受賞

毎年、毎日新聞社より贈られる毎日社会福祉顕彰の特別賞「国際青年年賞」を、幼い難民を考える会が受賞しました。

5年間におよぶカンボジア難民救援活動が評価を受けたものですが、同時に今後の活動に期待が一層かけられていることでもあります。賞金として、30万円を受けました。



## CYRメモ

- 4・20 山崎尚枝一時帰国。5・12渡タイ。
- 4・21 第20回理事会
- 4・23 森山真弓外務政務次官と懇談。
- 4・28 会員秋沢ヒロ、芝崎英子カオイダンキャンプ見学。～5・5
- 4・28 会員高島純子カオイダンキャンプ見学。～5・13
- 4・28 会員横井和子カオイダンキャンプ見学。～5・20
- 5・11 監査会
- 6・8 福島康人氏他17名(防衛庁防衛研修団)カオイダンキャンプCYRプログラム見学。
- 6・26 矢野和貴氏他14名(アジア福祉教育財団)カオイダンキャンプCYRプログラム見学。
- 6・29 関口晴美一時帰国。7・9渡タイ。
- 7・16 小倉雪枝一時帰国。7・26渡タイ。
- 7・23 宜野座江里子、一年間の任期で渡タイ。
- 7・26 山極小枝子代表代行、視察のため渡タイ。～30
- 7・31 河村好美一時帰国。8・25渡タイ。
- 8・3 三浦則子、一年間の任期を終え帰国。

- 8・7 会員細谷早里カオイダンキャンプ見学。～20
- 8・26 NHKラジオ「ふれあいラジオセンター」でCYR活動紹介。

### 事務局から

- 9月8日、日本テレビ「知られざる世界」で、カオイダンのCYR保育園の様子が放映されました。
- 現地スタッフを募集中です。明るく健康で一年以上滞在できる人を求めています。会の活動に関わりながら、将来は現地で働きたいと思われる方など、ぜひご一報ください。
- 国内でも定期的に来ていただけるボランティアを探しています。毎月開かれる交流会のスタッフや日常の事務的な様々な仕事があります。

——会費納入と寄付のおねがい——

CYRが息の長い活動を続けるには、まだまだ資金が不足しております。どうかこの運動の火が絶えぬようにひとりでも多くのみなさまのご理解とご支援をお願いいたします。